

和尚さんと小僧

楠山正雄

青空文庫

大^{たい}そうけちんぼな和^お尚^{しょう}さんがありました。何^{なに}かよそからもらつても、いつでも自分^{じぶん}一人^{ひとり}でばかり食^たべて、小僧^{こぞう}には一つもくれませんでした。小僧^{こぞう}はそれをくやしがつて、いつかすきを見^みつけて、和^お尚^{しょう}さんから、おいしいものを召^めし上^あげてやろうと考^{かん}えていました。

ある日^お和^{しょう}尚^{しょう}さんは檀^{だん}家^かから、大^{たい}そうおいしいあめをもらいました。和^お尚^{しょう}さんはそのあめをつぼの中^{うち}に入れて、そつと仏^{ぶつ}壇^{だん}の下^{した}にかくして、ないしよで独^{ひと}りでなめていました。

ところがある日、和尚おしょうさんは、用事ようじがあつて外そとへ出て行きました。出て行きがけに、和尚おしょうさんは小僧こぞうにいいつけて、「この仏壇ぶつだんの下のつぼには、だいじなものが入はいっている。見みかけはあめのようにだけれど、ほんとうは、一ひと口くちでもなめたら、ころりとまいってしまふひどい毒藥どくやくだ。命いのちが惜おしいと思おもつたら、けつしてなめてはならないぞ。」

といい置おいて、出て行きいきました。

和尚おしょうさんが出てしまふと、小僧こぞうはさつそくつぼを引ひきずり出だして、残のこらずあめをなめてしまいました。それから和尚おしょうさんの大切たいせつにしている茶わんちやわんを、わざと真まつ二つに割わつて、自分じぶんは布ふ団とんをかぶつて、うんうんうなりながら、いまにも死しにかけている

ようなふりをしていました。

夕方^{ゆうがた}になつて、和尚^{おしょう}さんが帰^{かえ}つて来てみますと、中は真^まつ

暗^{くら}で、明^{あか}りもついていませんでした。和尚^{おしょう}さんはおこつて、

「こらこら、小僧^{こぞう}、何^{なに}をしている。」

とどなりました。すると小僧^{こぞう}は布団^{ふとん}の中から、虫^{むし}の鳴^なくような

声^{こえ}を出^だして、

「和尚^{おしょう}さん、ごめん下^{くだ}さい。わたしは死^しにます。もうとても助^{たす}

かりません。死^しんだあとは、かわいそうだと思^{おも}つて、お経^{きやう}の一つ

も読^よんで下^{くだ}さい。」

といいました。

和尚^{おしょう}さんは、だしぬけに妙^{みょう}なことをいわれて、びっくりしま

した。

「小僧、小僧、いったいどうしたのだ。」

「きよう、和尚さんのたいじなお湯飲みを洗っていますと、いきなり猫がじやれかかって来て、そのひょうしに手をすべらして、お湯飲みを落としてこわしてしまいました。もうこれは死んで申しわけをするよりほかはないと思つて、つぼの中の毒薬を出して、残らず食べました。もう毒が体中に回つて、間もなく死ぬでしょう。どうかかんにんして、お経だけ読んでやって下さい。ああ、苦しい、ああ、苦しい。」

といいながら、おいおい、おいおい、泣きました。

ある日、和尚おしょうさんは、御法事ごほうじに呼よばれて行つて、小僧こぞうが一人ひとりでお留守番るすばんをしていました。お経きやうを讀よみながら、うとうと居眠りいねむをしていきますと、玄関げんかんで、

「ごめんくだ下さい。」

と人の呼よぶ声こえがしました。小僧こぞうがあわてて、目をこすりこすり、行つてみますと、お隣となりのおばあさんが、大きなふろしき包づつみを持もつて来きて、

「おひがんでございますから、どうぞこれを和尚おしょうさんに上あげて下ください。」

といって、置いて行きました。小僧はふろしき包みを持ち上げてみますと、中から温かそうな湯気が立って、ぷんとおいしそうな匂いがしました。小僧は、

「ははあ、おひがんでお団子をこしらえて持つて来たのだな。これを和尚さんにこのまま渡してしまえば、どうせけちんぼで欲ばりの和尚さんのことだから、みんな自分で食べてしまつて、一つもくれないにきまつている。よしよし、ちようどいい、ねむけざましに食べてやれ。」

と、こう独り言をいいながら、ふろしき包みをほどくと、大きなお重箱にいつぱい、おいしそうなお団子がつまっています。小僧はにこにこしながら、お団子をほおばつて、もう一つ、

もう一つと、食^たべるうちに、とうとうお重^{じゅう}箱^{ばこ}にいっぱいのお団^{だん}子^ごを、きれいに食^たべてしまいました。食^たべてしまつて、小僧^{こぞう}はじめて氣^きがついたように、

「ああ、しまつた。和尚^{おしょう}さんが歸^{かえ}つて來^きたらどうしよう。」

と、困^{こま}つてべそをかきました。するうち、ふと何^{なに}か思^{おも}ひついた

とみえて、いきなりお重^{じゅう}箱^{ばこ}をかかえて、本^{ほん}堂^{どう}へ駆^かけ出^だして

行^いきました。そして御^ご本^{ほん}尊^{ぞん}の阿^あ弥^み陀^ださまのお口^{くち}のまわりに、重^じ

箱^{ばこ}

のふちにたまつたあんこを、指^{ゆび}でかきよせては、こてこて

とぬりつけました。そして重^{じゅう}箱^{ばこ}を阿^あ弥^み陀^ださまの前^{まえ}に置^おいて、

部^へ屋^やに歸^{かえ}つて來^きて、知^しらん顔^{かお}をしてお経^{きやう}を讀^よんでいました。

しばらくすると、和^お尚^{しょう}さんは歸^{かえ}つて來^きて、小^こ僧^{ぞう}に、

「留守にだれも来なかつたか。」

とたずねました。

「お隣のおばあさんが、お重箱を持って来ました。おひがん

だから和尚さんに上げて下さいといいました。」

と、小僧は答えました。

「その重箱はどこにある。」

「本堂の御本尊さまの前に上げて置きました。」

「うん、それはなかなか気が利いている。どれ、どれ。」

といいながら、和尚さんは本堂へ行ってみますと、なるほ

ど重箱がうやうやしく、御本尊の前に上がっていました、

あけてみると、中はきれいになつていました。

「これこれ、小僧^{こぞう}。きさまが食べたのだな。」

と、和尚^{おしょう}さんは大きな声^{こえ}でどなりつけました。すると小僧^{こぞう}はすまして、のこのこやって来^きて、

「へええ、とんでもない、そんなことがあるものですか。」

といいながら、そこらをきよろきよろ見^みまわして、

「ああ、わかりました。御本尊^{ごほんぞん}の金仏^{かなぶつ}さまが上^あがったのです。

ほら、あのとおりの口のはたに、あんこがいつぱいいます。
」

と、こういって、和尚^{おしょう}さんはそれを見^みて、

「なるほどあんこがついている。お行儀^{ぎようぎ}のわるい金仏^{かなぶつ}さまもあればあったものだ。」

といいながら、おこつて手に持つていたほつす払子で、金かなぶつ仏さまの頭あたまを一つくらわせました。すると「くわん、くわん。」と金かなぶつ仏さまは鳴なりました。

「なに、くわんことがあるものか。」

と、またおこつて二度どつづけざまにたたきますと、また「くわん、くわん。」と鳴なりました。

そこで和尚おしょうさんは、また小僧こぞうの方ほうを振り返かえつてみて、

「それ見みろ、金かなぶつ仏さまはいくらたたいても、くわん、くわんというぞ。やはりきさまが食たべたにちがいない。」

すると小僧こぞうは困こまった顔かおをして、

「たたいたぐらいでは白はくじよう状じやうしませんよ。釜かまうでにしておやん

なさい。」

といいました。そこで大きなお釜かまにいつぱいお湯ゆを沸わかして、
金かなづつ 仏さまをほうり込みました。すると間まもなく、お湯ゆうがぐらぐ
らにたぎってきて、

「くった、くった、くった。」

といいました。

「そらごらんなさい、和尚おしょうさん。とうとう白はくじょう 状じょう しましたよ

。」

と、小僧こぞうさんはとくいらしくいいました。

青空文庫情報

底本：「日本の諸国物語」講談社学術文庫、講談社

1983（昭和58）年4月10日第1刷発行

入力：鈴木厚司

校正：大久保ゆう

2003年8月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

和尚さんと小僧

楠山正雄

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>